

No. J2202

チベットにおけるインド仏教の伝播と受容
—アティシャの活動を中心に—

筑波大学大学院 人文社会科学研究所
哲学・思想専攻 大学院生
PAK HEE EON

本研究は、チベットにインド後期密教を伝えたインド人学僧アティシャ(982-1054, Atiśa)の密教著作を取り上げ、性瑜伽というインド・チベット仏教における難題がどう解決されたかを究明することを目的とする。ここでいう性瑜伽とは、究極の真理は快樂の形を取って現れるという考え方に基づき、儀礼化された性行為(=性瑜伽)によって究極の悟りを得ることができるというインド後期密教の修行方法を意味する。独身生活を守る必要がある当時の出家比丘は、戒律を守るか、あるいは性瑜伽を実践して悟りを得るかというというジレンマに直面したのである。

研究の結果、次の点が明らかになった。アティシャは、性瑜伽を行わずに究極の悟りを得る方法があると説くことでこの問題を解決する。アティシャは人間が死ぬ瞬間、性瑜伽を行う時と同じような神秘体験が経験されると説き、生きている間に瞑想修行を重ねた出家比丘は、性瑜伽を行わなくてもこの瞬間に究極の悟りを得ることができるというのである。

しかし、出家比丘は生きている間には究極の悟りを得ることができないという問題が残る。アティシャは密教修行の最終目標として二諦双入という概念を提示することでこの問題をも解決する。二諦双入の修習においては、究極の悟りを得た後に、衆生の救済に励むことが強調される。大乘仏教が目指す理想は、たとえ涅槃の成就を見送っても衆生を救済することである。したがって、性瑜伽を行わず、究極の悟りを得ていない出家比丘であっても、仏教の究極目的である利他行に励む限り、究極の悟りを得たか否かという問題は重要性を失うようになる。

結論として、アティシャは利他行の実践を頂点とする教説を提示することで、自分の悟りの獲得のみに没頭する涅槃至上主義を警戒し、利他という仏教の根本理念に立ち返り、戒律と性瑜伽の矛盾という仏教界の難題を解決したと評価できる。